えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第87号
平成27年
(2015)
9 ― 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸・東京の庭園を巡る④　花を楽しむ庭園
「向島百花園」「旧古河庭園」……1～2
友の会特別観覧会「徳川の城　～天守と御殿～」……3
江戸博クリップ「不治の病」……3
新役員紹介（私のプロフィール）……4～5
友の会セミナー
「太田道灌　―江戸を切り開いた悲劇の名将―」……6
友の会セミナー
「地名からひもとく江戸東京の街の変遷」……7
えど友広小路……8～9
会員からの投稿「相撲博物館」／えど友サークルだより／友の会めも／友の会創立15周年記念事業のご紹介
江戸名所図会を歩く㉑［桜田から氷川明神社］……10
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

江戸・東京の庭園を巡る④

花を楽しむ庭園
「向島百花園」「旧古河庭園」

都立庭園巡りの最終回は、花を楽しむために造られた江戸時代と大正時代の庭園をご紹介します。
これからの季節、由緒ある庭園で秋の草花を楽しんでみてはいかがですか。

▲萩のトンネル（向島百花園）

▲秋バラと洋館（旧古河庭園）

●向島百花園

江戸の町人文化が花開いた文化・文政期(1804～1830)に、佐原鞠塢(きく)によって造られた花園です。庶民的で文人趣味豊かな庭として、大名庭園とは異なった趣があります。

＜庭園の歩み＞

文化初年頃、日本橋で骨董商を営んでいた鞠塢が、向島の寺島村にあった武家の空き地を買い取り、「百花園(ひゃくかえん)」の名付け親と伝わる酒井抱一(ほういつ)をはじめ、交流のあった多くの文人墨客(ぼっかく)の協力を得て、風雅な草庭を造り上げました。開園当初は梅の木が主体で、亀戸梅屋敷になぞらえて「新梅屋敷」と呼ばれ、庶民に親しまれました。その後四季の草花を楽しめる庭となり、特に秋の草花の美しさで知られるようになります。また、11代将軍家斉の「お通り抜け」や12代将軍家慶の「梅見の御成り」が記録に残っています。

佐原家の運営は明治時代になってからも続きましたが、大正4年(1915)に小倉家の所有となり、昭和13年(1938)に東京市に寄付されました。明治43年(1910)の隅田川大洪水や昭和20年の東京大空襲で大きな被害を受けましたが、昭和24

年に東京都により復興しました。昭和53年に国の名勝史跡の指定を受けています。

＜園内の見所＞

・四季の草花……園内で観賞できる草花と樹木は、四季を通じて500種を超えます。鞠塢の著した『群芳暦』に記載された植物を基本とし、昔からの姿を伝えるよう工夫されています。訪れるごとに違う表情を見せる庭が楽しめます。

・花の棚……フジ・ミツバアケビ・クズの花棚があり、庭の景色のアクセントとなっています。また、ヒョウタン・ヘチマ・ヘビウリの棚もあり、果実の下がっている風景も趣があります。

▲芭蕉句碑

・文人たちの足跡……芭蕉の句碑をはじめとする多くの句碑が点在し、文人墨客たちの足跡がたどれます。園内を巡り歩けば、お気に入りの一句と出会えるかもしれません。

・年中行事……江戸時代から続く各種の伝統行事が継承されています。冬から春にかけては春の七草籠・隅田川七福神めぐり・梅まつり、夏から秋にかけては大輪朝顔展・虫ききの会・秋の七草・月見の会などが行われます。会期に合わせて来園すれば、また違った楽しみ方ができます。

＜花だより＞

９月中旬から10月上旬にかけて行われる萩まつりの頃には、全長30ｍのハギのトンネルが鮮やかに彩られます。秋晴れの日差しの下で、その中を歩けば爽快そのものです。このほか、オミナエシ・ケキョウなどの秋の七草がすべて見られます。

▲虫ききの会

●旧古河庭園

十大財閥の一つに数えられた古河家の本邸として大正時代に造られました。武蔵野台地の高低差を利用して、洋風庭園と日本庭園が巧みに組み合わされています。四季を通じてさまざまな草花が見られますが、とりわけバラの花壇が有名で、春と秋の開花時には多くの人々が訪れます。

＜庭園の歩み＞

江戸時代中期には、この地に「西ヶ原牡丹屋敷」と呼ばれる牡丹屋太右衛門の別荘（牡丹園）があったといわれています。明治20年代に当時の元勲であった陸奥宗光邸となり、その後、宗光の次男潤吉（古河財閥２代目当主）が古河市兵衛（初代）の養子となったため、古河家が譲り受けました。大正６年（1917）、市兵衛の実子虎之助（３代目）の本邸として洋館と洋風庭園が、２年後に日本庭園が築造されました。大正15年に虎之助夫妻が牛込に転居すると、古河財閥の迎賓館として利用されるようになります。

▲日本庭園の紅葉

昭和16年（1941）頃陸軍に、同20年には進駐軍に接収され、財閥解体に際して国有財産となりました。その後、国から東京都へ無償貸与され、昭和31年に都立公園として開園されました。昭和57年に東京都の名勝、平成18年に国の名勝に指定されています。

＜園内の見所＞

・洋館……庭園のシンボルともいえるのが、ジョサイア・コンドル設計による煉瓦造り２階建ての洋館です。外壁は真鶴産の新小松石（安山岩）の野面積（のづら）み、屋根はスレート葺きで、急勾配の切妻屋根が山小屋風のデザインになっています。邸内に入ると、賓客を迎える１階は洋風、日常生活の場である２階は和風と明確に異なった趣です。１階では室内装飾のレリーフが目を引き、２階では洋風廊下からいきなり現れる和室に驚かされます（内部見学は日時予約制）。

▲秋バラのコンサート

・洋風庭園……洋館から見下ろす斜面に、バラ花壇が左右対称の幾何学模様を描いて広がっています。洋館と同じくコンドルの設計によるもので、ビクトリア朝のイタリア（テラス）様式を採り入れています。作庭当時はバラの品種もあまり多くなかったようですが、現在はおよそ90品種180株のバラがあり、春と秋に咲き誇る様は実に見事です。下から見上げると、洋館を背景に花の色合いがいっそう鮮やかに浮かび上がります。バラ園の先はツツジ園に続き、洋風庭園と日本庭園の切り替えポイントになっています。

・日本庭園……段下の日本庭園は、名人と呼ばれた京都の庭師・７代目小川治兵衛の作になるものです。心字池を中心とした回遊式庭園で、雪見灯籠・石橋・滝などが巧みに配置されています。また、庭の一角にある茶室からの眺めも見応えがあります。

＜花だより＞

10月中旬頃、秋バラが見頃を迎えます。いろいろな方向から眺めの変化を楽しんでいると、時のたつのを忘れてしまいます。また、「秋バラのフェスティバル」の期間中にコンサートも行われます。バラの香りに包まれながら音楽を楽しまれてはいかがでしょうか。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

※参考資料

東京都公園協会発行『向島百花園』『旧古河庭園』

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成27年８月９日）

特別展「徳川の城　～天守と御殿～」

８月４日(火)、特別展「徳川の城～天守と御殿～」の初日に行ってきました。夏休みとあって、メモを片手の小中学生が大勢入場していました。

その友の会特別観覧会が８月９日(日)17時から開催されました。初めに、本展覧会担当学芸員の齋藤慎一さんから説明を受けた後に見学に入りました。

徳川幕府は江戸城の他、駿府城、名古屋城、伏見城、大坂城、二条城、彦根城など、諸大名を動員し天下普請を行い、将軍家の権威を見せつけました。今回はその城の勇壮な天守と壮麗な御殿をさぐる展覧会です。

まず初めに目に飛び込んできたのは、明暦の大火以前の江戸の景観を描いた６曲１双の「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)。見事な装飾を施した金雲の間から江戸城を中心に江戸市中が鮮やかな色彩で克明に描かれています。遠景に富士山の雄姿も見られます。また同じく富士を背景にした土佐光成画「駿府鳥瞰図」も実に見事な筆さばきです。

続いてひときわ目を引いたのは、静岡県立島田工業高校建築科の生徒さんの卒業制作である40分の１の「駿府城天守模型」で、檜材を使った天守は華麗でたくさんの人がカメラを向けていました。

また関ヶ原の合戦と大坂の陣の折に家康が所用していた「写形歯朶具足」は必見です。徳川家ではこれを瑞兆の品として尊び、将軍家の正月の具足開きの儀礼に代々使われていました。金色に輝く円形の歯朶をあしらった兜と漆黒の鎧は圧倒的な迫力がありました。

そして、本展示品の中でも齋藤学芸員一押しの作品が、江戸時代初期の本丸御殿と城下町の様子、朝鮮通信使が国書交換を行うための行列と場面を描いた８曲１双の「朝鮮通信使図屏風」です。威儀を正して進む通信使の行列を町屋の内から興味深そうに見物する江戸市民、さらに本丸大広間での儀式の様子などを今に伝える極めて貴重な屏風となっています。

さて、本展では江戸城の３DCG映像も見られます。昨年１月にNHKで放送された「よみがえる江戸城」を約４分に再編集したものです。大型画面で、絢爛豪華な障壁画で彩られた江戸城大広間、松の廊下、大奥内部がテレビでは味わえない圧倒的なスケール感でバーチャル体験できます。来場の皆さんの人気コーナーになっています。

本展示のエピローグは、すべて重要文化財になっている多数の旧江戸城写真のガラス原版、そして最後、江戸城明渡しの帰途を描いた川村清雄の傑作「勝海舟江戸開城図」です。刀を杖に江戸城を去る勝海舟、その凛とした佇まいの中に漂う寂しげな表情と、後ろで無念、憤懣やるかたない表情で睨みつける旧幕府軍将兵の顔との対比、足元に転がった葵紋の軒丸瓦、まさに江戸開府以来、265年続いた江戸時代の終焉を物語っています。

展覧会は９月27日まで開催されています。ぜひご覧いただきたいと思います。　　参加者143人。

【取材】文：広報部会・岡本　脩
写真：同・前田太門

江戸博クリップ

「不治の病」

展示事業係学芸員　小林　愛恵（こばやし　まなえ）

早速で失礼いたしますが、この場をお借りして公言させていただきます。わたくし、「神輿馬鹿」です。担ぐ方の。

わたしの神輿シーズンは５月の神田・下谷から始まり、三社、鳥越、天王祭と続く。梅雨時から夏に小休止をはさみ、８月中旬の深川あたりから再スタートして、９月いっぱい、遅くとも10月上旬まで、ほぼ毎週末どこかで担ぐ。ときには数年・数十年に一度しか出ない特別な神輿を担ぐこともある。物心つく前からこのかた、海の向こうで勉学に励んでいたときも、山の彼方で仕事に勤しんでいたときも、神輿を一度も担がなかった年はない。

「町会半纏で担ぐ」をモットーにしているので、睦や同好会には所属せず、よく一緒に担ぐ仲間たちと、地道なネットワークづくりで祭を開拓してきた。思えば、ひょんなご縁で氏子町会の方と知り合い、誘ったり誘われたりしながら常連になったところばかりだ。地元の方々が語る町の歴史に耳を傾けつつ、土地の高低差を体感したり、失われた地名・町名が残る町会名を発見したりすることも、楽しみのうち。目に見えぬものを畏れ敬い、礼節を尊ぶ。そこに義理、人情、意地や心意気などが重なり合って、祭や神輿に関わることすべては、物事の本質や人間関係の神髄に触れ、学ぶ機会であるように思う。

……なんてのは、はばかりながらも後付けである。神輿を見ると、居ても立ってもいられないから担いじゃうのだ。こればっかりは、つける薬に飲む薬、治る見込みもありはしない。

というわけで。シーズン中の週明け、湿布臭を盛大に発していても、御賢察賜り、何卒不問に付していただきたい。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

新役員紹介
（私のプロフィール）

５月29日開催の第15回定期総会で選出された新役員15名の役割分担と、プロフィールをあわせてご紹介します。イラストは前回同様、総務部会員の藤井文乃さんによるものです。新役員へのご支援、ご協力を今後ともどうぞよろしくお願い致します。

副会長　辻井（つじい）　桜（さくら）（総務部会長）

着物が大好き、下駄も大好きな私が、江戸にあこがれて友の会に入り、よそながら眺めていたけれど、少しは外にでなければとボランティアを始め、のんびり発送をしていたところへ、役員の順番が回ってきてしまいました。とても無理といったのに押し切られ、女は度胸と腹をくくり、引き受けざるを得ませんでしたが、覚えなければならないことがたくさん。これからどうなるかわかりませんが、よろしくお願いします。

会　長　畠中（はたけなか）　勇（いさむ）

７月にドイツの古い街、美しい木組みの家並みで、世界遺産に登録されたゴスラー、クヴェトリンブルグなど見てきました。1500年代に建てられた家が、修復をしながらも現在も生活の場として使われており、歴史が目の前で体験でき、感動しました。古いものは捨て去り新し物好きの日本、わずかに残された日本の古い街、そして歴史を大切にしなければと思いました。歴史を愛する友の会のみなさん、これから２年間よろしくお願いします。

事務局長　柏原（かしわばら）　典雄（のりお）（事業部会員）

友の会に関わるようになったのは、「神田川を歩き楽しむ会」を知ってからです。もともと「消えた川筋」をなぞって歩くのが好きで、紹介本を片手にここかあそこかと一人で悦に入っていました。ただ参加した時には神田川が落語に化けていましたが、それはそれで一人よりは大勢が楽しい決まりです。この度、事務局長を引受させていただきましたが、縁の下の役割を忘れずに微力ながら力を尽くします。皆様のご協力をよろしくお願いします。

副会長　小林（こばやし）　弘明（ひろあき）（事業部会長）

つまらない物をいろいろ集めました。各種洋酒やショットグラス、清酒のミニ薦被り・ぐい呑み等々。少しマシなのは、カフスボタンや端午の節句飾りなど。今は一部を除き処分し、江戸東京関係の本が増えていくだけです。もう一つ増えていく書籍がありました。趣味の俳句のための各種歳時記・行事に関連する著書で、これも友の会活動に多少は役立っているようです。今、一番嬉しいのは友の会生活で江戸東京に関する知識が増えていくことです。

会　計　菊池（きくち）　真一（しんいち）（広報部会員）

友の会へは発足時に入りましたが、当初は全く活動に興味のない「名ばかり会員」でした。江戸文化歴史検定の受検をきっかけにセミナーや見学会に参加するようになり、退職を機に広報部会に入りました。取材や活動への参加を通じて江戸東京への理解が深まり、かつ多くの方々との交流が生まれることは、大いなる喜びです。今回思いがけず役員という大役を任されましたが、少しでも皆様のお役に立てればと思っています。

副会長　前田（まえだ）　太門（たもん）（広報部会長）

広報部会のメンバーになり、いろいろな経験をすることで江戸東京について学ぶことができました。友の会のホームページを担当していて、家で黙々とホームページの更新作業をしています。しかし、広報部会の活動、他の部会の方との交流などで、友の会の活動が楽しくなってきました。広報部会では、庭園、博物館を見学するイベントも行われ楽しみが増えました。楽しく活動ができるよう努力していきたいと思います。

会　計　並木（なみき）　愛（あい）（総務部会員）

友の会発足と共に入会いたしました。前に少々習った古文書講座に参加するうち、いつの間にかすっかりはまっていました。当時は定期的に病院に検査に行っておりましたので思いの通りにならないことが多くありました。幸い再々発もなく時間的に楽になりましたので日頃お世話になっている友の会の総務部会に参加させていただき、『えど友』の発送や古文書講座の受付のお手伝いをしています。何卒、今後ともよろしくお願い致します。

林　正信 (事業部会員)

数年前、定年後は福岡(福岡県出身)には戻らないことを決め、もっと江戸東京を知ろうと決めました。ある時、江戸博を知り、大きな感動を受け、早速 友の会に入会して、セミナー・見学会などには可能な限り、出席・参加してきました。やがて部会に入会して活動したくなり、平成25年末に事業部会にお世話になることになりました。友の会会員の皆様のために、微力ながら頑張りますので、何卒、よろしくお願い申し上げます。

松原　明子 (総務部会員)

最初は主人について友の会の行事に参加していましたが、いくら妻でも「刺身のツマ」ではつまらないと思い、５年前に入会し､総務部会に所属､発送等のお手伝いをしながら、人と人の出会いの素晴らしさを感じています。生け花の教授活動を20年以上やっている関係もあり、毎年の総会では舞台のお花を生けさせていただいており、私にとってもとても勉強になります。役員として少しでもお役に立てるよう頑張りたいと思っています。

川上　由美子 (事業部会員)

根っからの歴史好き。どちらかといえば古代史に興味があったのですが、縁あって「友の会」に入会。見学会やセミナーで皆さんが活発に楽しそうに活動する姿に触れて、すっかり「江戸」の魅力に目覚めてしまいました。入会２年目の新参者ですが、皆様の友の会ライフが充実した楽しいものとなるように、また自分自身の「江戸」に対する思いと知識をより高められるように努力したいと思います。

丹羽　高利 (館蔵古文書翻刻プロジェクト)

何度も挫折を繰り返しながらも諦めずに古文書解読の勉強を続けた結果、少しずつ読めるようになり、「町方書上」チームに参加し、その成果を立派な本にしていただき感謝しております。今期から新しいプロジェクトチームを担当することになり、町方に勝るとも劣らないチームができるように頑張ります。江戸博が所蔵する膨大な古文書を翻刻しようという遠大な計画に身震いしますが、皆さまのご支援が頼りです。よろしくお願いします。

岡本　脩 (広報部会員)

下町深川で生まれ育ちましたが、山の手の駒込に移り住んで60年以上が経ちます。ちなみに家内も人形町生まれの江戸っ子。小生は短気でせっかち､涙もろくておせっかい､東京人の典型です。昼下がりの蕎麦屋、ソバ味噌と板ワサにぬる燗、仕上げにたぐってさっと帰る、これがたまりません。女房相手に晩酌を欠かさず、「酔い覚めの水千両」を日々実感しています。こんな呑んべぇ老人ですが、何とぞお見知りおきください。

監　事　川田　明良

監事２期目です｡昭和22年深川で生まれた団塊の世代です。数年後､麻布へ転居し、以後、幼稚園に始まり大学の卒業まで、そして就職、結婚、子供の誕生と、人生の重要なイベントをそこで経験してきました。30年前に横浜の大倉山に転居しましたが、私の中では今も東京での生活歴の重みの方が大きく、東京の方に気持ちが向くことが多いです。因みに、最初の職場も最後の職場も墨田区内で、つながりが深いです。

分部　祐治 (総務部会員)

総会も無事に終わり､この度役員に再任されもう１期務めさせていただくことになりました｡今までも総務部会に所属し､部会活動や各種セミナーや見学会等に参加させていただき楽しく江戸東京の文化や歴史を学ぶことが出来ました。これからも新役員、部会員の皆様と共に友の会が益々充実するよう精進したいと考えております。今後ともご指導のほどお願い申し上げます。

監　事　松原　良

このプロフィールを書くのも６回目となりました｡役員４年､２年置いて会長４年､引き続き監事２年と10年も役員会に通ったことになります｡そして今回と、ほとんど「えど友病」ともいえる状態ですが、最近は落語や寄席に行く機会も少し増え、川柳・水彩画などに前よりは時間がとれるようになりました。「えど友サークル」の活動は体力の許す限り続けようと思いますが、最後の御奉公で監事としてお役に立てればと思っています。

第153回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成27年6月27日）

太田道灌―江戸を切り開いた悲劇の名将―

講師　黒田基樹さん（駿河台大学教授）

太田道灌の経歴

太田道灌の生きた時代は室町時代から戦国時代への転換期にあたります。関東には、室町幕府の分身で鎌倉府という政権が存在していました。その首長は鎌倉公方足利氏（京都足利氏の一族）でその補佐役にあたるのが関東管領です。享徳３年（1454）、公方足利成氏が関東管領山内上杉憲忠を謀殺します。これを契機として、両勢力の全面戦争が始まり、以後30年近くにわたり戦乱が続きます（享徳の乱）。関東管領山内上杉氏は上杉氏のなかでも本家にあたり、後に上杉謙信を輩出します。この山内上杉氏と扇谷上杉氏は両上杉と呼ばれ、太田家は扇谷上杉氏の家臣でした。

享徳の乱当時、公方足利氏は下総古河（茨城県古河市）を拠点とし、上杉氏方は五十子（埼玉県本庄市）に陣を置き、利根川を挟んで対峙していました。当時利根川下流域は氾濫原だったので、大軍を率いて渡ることのできる地点としてこの地域が選ばれました。足利氏は東上野（群馬県）・下野（栃木県）から房総、上杉方は西上野（群馬県）から武蔵以南を勢力圏に置き、およそ当時の荒川が両勢力の境界線でした。扇谷上杉氏は河越城・江戸城を拠点とし、相模から武蔵東部にかけての地域を勢力圏としました。

江戸城の取り立ては、長禄元年（1457）４月といい、長禄３年には道灌が江戸城主であったとの徴証が確認されています。享徳の乱勃発から３年位で築かれたことになります。道灌が生きた時期の史料は絶対的に少ないのですが、今後新しい史料が出てくればこの空白の３年間のことが分かるかもしれません。築城者は、江戸時代には道灌父子と伝わっていますが、当時の史料によると、上杉氏には太田のほかに上田、三戸、萩野谷氏らの重臣がいるので、扇谷上杉氏が総力を挙げて築城したものといえます。

道灌の系譜で確実なのは、道灌の５、６代前の先祖が南北朝時代に丹波から相模に移住したことだけです。扇谷上杉氏も丹波が本拠であり、太田氏は最初から扇谷上杉家臣であったようです。道灌は永享４年（1432）生まれ、太田資清（自得軒道真）の嫡子です。仮名は源六、実名は不明ですが江戸時代伝承の「資長」が有力です。寛正２年（1461）に家督を継承、扇谷上杉氏家宰職（執権・執事）、相模国守護代も継承しました。文明３年（1471）から同６年の間に出家して静勝軒道灌と号します。文明９年、山内上杉氏宿老・長尾景春を追討します。文明10年、景春与党の下総千葉孝胤追討において、上杉方の主力を務め、道灌の武名は大いに轟きました。文明18年７月26日、主君定正によって謀殺されました。55歳でした。

道灌は、当時から文武兼備の名将と評されました。文化面でも多くの和歌集を所持、和漢に高い能力を有しました。江戸城には京都の公家や著名な文化人を招き、文化サロンを形成しました。道灌は死後数年で伝説化し、「山吹の里」伝説（18世紀の成立）はこれらを背景にしたものです。

道灌の政治的立場

家宰としての役割は主家の所領の管理や諸税の徴収のみならず、当主の代行者として軍勢の大将を務めたり、他家との様々な交渉、幕府や公方との交渉も務めるため、主家と家宰とは厚い信頼関係で結ばれている必要がありました。

戦乱の恒常化により、江戸城も軍事拠点として恒常化され、江戸城を中心に地域支配を展開するようになりました。その結果、地域内に存在する領主は、事実上、道灌の軍事指揮下に編成され、他家の所領も道灌の支配下に置かれました。このように一定領域の一元的支配関係が形成されるのは戦国大名の領域権力の特質でもあります。戦国時代の政治権力の特徴を考えるとき、私は、太田道灌が戦国時代のさきがけの人物ととらえています。

道灌謀殺の謎

太田道灌謀殺の場所は、通説では扇谷上杉氏の相模における本拠、糟屋館においてとされますが諸説あります。道灌謀殺に伴い、下総・武蔵国境地域において戦乱が生じていたので、単なる謀殺事件ではありませんでした。軍記物『北条記』では道灌による扇谷上杉氏の家政の独占に対し、他の家臣に不満が生じたことを記しています。

道灌に関しては拙著『扇谷上杉氏と太田道灌』『図説太田道灌』が最新の研究にもとづいています。道灌の時期の史料は絶対的に少なく、新しい史料が出てくれば分かることがあるかもしれません。これからも研究は続きます。

レポーターからひとこと

関東の戦国時代の勢力図等、大変詳しく説明していただき、分かりやすい講演でした。質問も５人と、皆さんの興味深さを感じました。黒田先生の本は江戸博図書室でも閲覧が可能です。

参加者226人。

【記録】文・写真：広報部会・竹中祐見子

第154回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成27年7月11日）

地名からひもとく 江戸東京の街の変遷

講師　岩垣　顕（あきら）さん（江戸東京文化研究家）

今日は皆さんと両国から都心の方へ向かって一緒に歩き、その途中の地名を拾いながら、お話を進めていきたいと思います。

両国から柳橋へ

江戸時代においては、両国はこの辺一帯の俗称で、町名にはありませんでした。東の墨田区側で昭和４年(1929)に東両国という町名が誕生し、同42年に東の字が取れて両国となります。西の中央区側では昭和９年に日本橋両国ができますが、同46年には東日本橋に変わってしまいます。橋の東西に両国という町名がそろっていたのはわずか４年間でした。

江戸博の住所は両国でなく横網（よこあみ）ですが、相撲の街ということから「横綱（よこづな）」と思う人が多いようです。かつて墨田区が横網町会に横綱への変更を打診したこともありましたが、隅田川の漁業にゆかりのある伝統的町名なので、地元は受け入れませんでした。

蔵前は江戸時代に幕府の御米蔵があったことによる町名ですが、当時は俗称でした。昭和９年に正式に蔵前という町名になりますが、それ以前にあった町名の中に黒船町と三好町があります。黒船町とはオランダの黒船がやって来た地で、三好町はその黒船が舳先（へさき）(みよし＝水押（みおし）)を向けた地であることが由来です。

柳橋も昭和９年にできた町名で、江戸時代には俗称でした。ここの切絵図に書かれている「代地」というのは幕府が強制的に土地を収用して住人を別の場所に移した所で、当初は市街地の整備のためでしたが、明暦の大火後は火除地を作るための移転です。これが柳橋エリアに集中したために、柳橋が代地という名前で呼ばれるようになりました。

馬喰町から須田町へ

馬喰町（ばくろちょう）の「馬喰」とはもともと「博労（ばくろう）」で①馬の善悪を鑑定する人②馬の病を治す人③馬を売買・周旋する人という意味があります。馬喰町は旧日光街道の西側に位置し、街道で使われる馬の見立てや仲介をした人が住んだ場所です。また隣の横山町にある問屋街や、北側にある郡代屋敷にやって来る人のための旅館街としても発展しました。

東神田は昭和９年にできた町名で、もともとあった橋本町は博労役「橋本源七」の拝領地に由来します。橋本町４丁目には願人坊主の居住する願人長屋がありました。願人坊主とは「人に代わって願掛けの修行・水垢離（みずごり）などをした乞食僧」で、非常に身分の低い職業でした。博労から願人坊主や皮なめし業に変わった人たちも多かったようです。

秋葉原駅の界隈には昔から続いている町名がたくさん残っていますが、江戸時代には秋葉原という地名はありませんでした。明治２年(1869)の大火後に火除地が作られ、鎮火社(火伏せの神)が祀られますが、当時の市民が秋葉権現（あきはごん）を勧請したと誤解したため秋葉神社と呼ばれるようになり、火除地も「秋葉の原」「秋葉ヶ原」と呼ばれるようになりました。明治23年には秋葉原駅が誕生し、秋葉原という名前が広く浸透していきます。

外神田という言い方は江戸時代からよく使われていて、神田川を挟んで外側が外神田、内側が内神田です。ここには江戸時代から続く町名がひしめいていましたが、昭和39年に外神田という町名に統一され、昔からの貴重な町名がなくなってしまいました。

須田町は東京の中で都電の大ターミナルとして知られていた場所で、その由来の一つが近くの万世橋駅の存在です。明治の初め頃から万世橋界隈というのは有名な繁華街で、明治45年には甲武鉄道(中央線の前身)がここに駅を開業しますが、大正12年(1923)の震災で駅舎が焼失し、昭和18年に廃止されました。

駿河台から神楽河岸へ

駿河台はもともと本郷台地の先端部分で、日比谷入り江の埋め立ての後に仙台堀で北と南に分離して、南側を駿河台と呼ぶようになりました。家康の出身地である駿河の徳川家臣団に与えた土地ということです。ここも俗称地名で、昭和８年に正式町名となりました。

猿楽町の「猿楽」とは能のことで、「散楽」が転じたものです。能楽師の観世大夫の屋敷があったことからつけられた町名です。江戸時代には「エテ」楽町と呼ばれていました。猿が「去る」に通ずるので「得手」と言ったことからきています。

本郷とは「ある郷の一部で最初に開け、付近の発展の基礎となった土地」で、平安時代には湯島郷の中の本郷でした。昭和40年にできた本郷１丁目は、御弓同心の組屋敷があった元町と弓町を合わせた町名です。

飯田橋はもともと飯田町でした。家康入府の時に案内役となった飯田喜兵衛の名が元になっています。明治14年に飯田橋という橋が架けられ、昭和３年に飯田橋駅ができたことにより、昭和41年に町名も飯田橋となります。江戸時代には水運の物流拠点であり、昭和に入ってからは鉄道貨物の拠点として発展しました。

神楽河岸は外堀に面した物資の荷揚場として開けた町です。隣に揚場町という町名も残っており、そこにある軽子坂は軽子(物資の運搬人)が船荷を背負って往来した坂です。

機会があればまた続きをお話ししたいと思います。まさに街歩きに終点は無しです。

レポーターからひとこと

まるで岩垣さんと一緒に散歩しているような楽しいひとときでした。さすが「雑司が谷散人」と異名を取るだけのことはあります。また普段何気なく歩いている街の中にも、古い町名の痕跡が残っていることに改めて気づかされました。　　参加者205人。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

会員からの投稿

―両国周辺散歩 小さな博物館―

【相撲博物館】

瀬　谷　葉　子

お相撲さんの子ども

5、6年前国技館2階席で相撲を楽しんでいたところ、少し離れたところから「パパ頑張れ」という声が聞こえました。5歳くらいの男の子でした。時間いっぱいになり、一方が土俵の外に押し出された途端「わあーっ」という泣き声に変わり、男の子は、若いお母さんの胸でしゃくりあげていました。

私はこの力士の成績をずっと気にかけていましたが、その後十両から落ち、今は廃業しています。このように、若者が伝統の中で苦労し踏ん張って力士となり、相撲の歴史を作り上げてきたのでしょう。

相撲の文化、歴史を学べる博物館

「相撲博物館」は国技館1階にあり、昨年創立60周年を迎えました。錦絵や番付、化粧回しなど相撲に関する資料を保存し、年6回の展示を行っています。国技館の中にあるので大きい会場と思っていたのですが、「小さな博物館」でした。

常設展示スペースはなく、テーマを替えて展示しています。過去には新入り力士の「相撲学校」を紹介する展示などもあり、土俵以外の相撲の世界も伝えています。また、学芸員の方が解説をする日もあり、分かりやすく面白いので、皆さん頷きながらも笑顔で聞き入っています。

相撲博物館の楽しみ方

今回、学芸員の中村史彦さんにお話を伺いました。子供の修学旅行や見学も受け付けており、予約してもらえれば、解説もしているそうです。友の会の皆さんには「江戸東京博物館に来た折に、相撲博物館にちょくちょく足を運び、展示解説も聞いて見学してはいかがでしょうか。」と話していらっしゃいました。

展示中の様々な資料は古文書の勉強にもなり、相撲関係の美術品を楽しむなど、1500年といわれる相撲の歴史を通して学ぶことは多いと思

▲学芸員の中村史彦さん

います。両国駅前の土俵のある飲食店「花の舞」では、時折修学旅行の生徒さんでいっぱいになることもあります。

開館時間：10時から16時30分
休館日：土、日、祝日(一部開館あり)
入館料：無料(東京本場所中は大相撲の観覧券が必要)
電話番号：03-3622-0366

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

6月16日(火)鈴木紘一さんの月番で、落語DVD鑑賞。柳亭市馬の「雑俳」と「淀五郎」、三遊亭兼好の「木乃伊取り」と「粗忽の使者」を鑑賞した。参加者17人。

7月14日(火)武田夏男さんの月番で、春夏秋冬に関する噺をDVD鑑賞。春：柳亭市馬の「長屋の花見」、夏：柳家さん喬の「夢の酒」、秋：柳家小さんの「試し酒」、冬：柳家権太楼の「にらみ返し」を鑑賞した。参加者18人。

◆藩史研究会

6月12日(金)土屋献一郎さんが筑後国「柳河藩」の発表を行った。幕末まで藩主は立花氏であったが関ヶ原の戦いで西軍に属して改易。田中氏が無嗣改易になり立花宗茂が20年後に12万石(支藩を含む)で復帰した。参加者21人。

7月10日(金)今回で満10年(120回)を迎えた。辻井清吾さんが「河内狭山藩」を取り上げた。小田原で滅んだ後北条氏の子孫を藩主とし、明治まで存続した1万1千石の小藩(城はなく陣屋)。5代氏朝は奏者番兼寺社奉行まで出世した。参加者22人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

6月11日(木)八丈島の島役人長戸路家に伝わる寛政4年(1792)の御用留(中)P69～75を解読。地役人一同署名の江川太郎左衛門役所宛の手紙。参加者8人。

6月26日(金)御用留(下)P1～10を解読。八丈島諸作出来方お訪ねについての回答文。参加者9人。

7月9日(木)(下)P10～14を解読。飢餓で流人にもお救いをと再度の願いを書く源左衛門の手紙。参加者9人。

7月24日(金)(下)P14～23を解読。流人のお救いの例。人減らしのため移住する100人の出百姓にかかる入用の見積書。参加者9人。

◆江戸東京を巡る会

6月6日(土)あじさい祭りが催されている白山神社で多様なあじさいを観て回り、公開されている富士塚に登った。江戸時代の御薬園の伝統をひく小石川植物園では園内の史跡を見、花菖蒲などの季節の花々を愛でることができた。参加者54人。

◆『江戸名所図会』輪読会

6月18日(木)巻之三 天璣之部の最後は西村英夫さんの担当。稲城市の青渭神社と川崎市多摩区よみうりランド東側エリアの寿福寺と法泉寺に関する発表をした。県指定無形民俗文化財の獅子舞が法泉寺を基点に薬師堂と子之神社で行われる。参加者18人。

7月16日(木)今回から巻之四 天権之部に入り、都心に戻る。柴田孝さんの担当で尾張徳川上屋敷跡(現防衛省)の東側に位置する市谷亀岡八幡宮、薬王寺、月桂寺などを解説。参加者17人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

6月25日(木)『えど友』第58号10頁の「落語で江戸散歩⑰唐茄子屋政談」をなぞって歩いた。都営地下鉄浅草駅に集合。駒形橋を渡り、本所達磨横町跡、吾妻橋、浅草広小路跡、浅草寺裏、誓願寺店跡を巡った。参加者44人。

6月28日(日)1回目と同じコースを巡った。参加者35人。

7月25日(土)今回は夏休みスペシャル版。学習室にて林家彦六や三

遊亭竜楽のDVD、柳家小のぶの「たがや」のCDなどを鑑賞した。その後納涼会で大いに歓談し、両国橋へ繰り出して隅田川花火大会を楽しんだ。参加者43人。

◆日本の大道芸伝承会

6月17日(水)深川江戸資料館主催のイベント「江戸の物売りと大道芸」へ次回も出演することが決まった。外郎売り、がまの油売りで発声練習をした後、南京玉すだれなどの練習。参加者3人。

7月15日(水)外郎売り、がまの油売りで発声練習をした後、南京玉すだれなどに加え、蚊帳売り、かりんと売り、おでん売りなどの新演目に挑戦した。参加者3人。

◆江戸を語る会

7月4日(土)河合雅彦さんの発表「史料に見る江戸町役人(ちょうやくにん)と商人」があった。『天保撰要類集』などの古文書で町年寄のエピソードを解説し、古文書や当時の版画絵、地図で魚市場、青物市場の様子や札差の仕事内容を紹介した。古文書の原文を読む醍醐味を味わい、江戸の町民を理解するのに役立った。参加者12人。

◆かっぽれの会

6月24日(水)かっぽれの入門曲、端歌「奴(やっこ)さん」の曲をお稽古した。参加者3人。

7月1日(水)かっぽれの入門曲、端歌「奴さん」の曲をお稽古した。参加者3人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成27年6月～7月

◆役員会6月9日(火)15人。7月14日(火)15人。◆事業部会6月2日(火)24人。7月7日(火)24人。◆広報部会6月23日(火)10人。7月21日(火)12人。◆総務部会6月30日(火)20人。7月28日(火)16人。◆古文書講座　入門編：6月10日(水)午前91人・午後83人。7月1日(水)午前85人・午後74人。初級編：6月17日(水)午前64人・午後42人。7月15日(水)午前61人・午後44人。中級編：6月13日(土)午前38人・午後24人。7月18日(土)午前37人・午後24人。◆町方書上翻刻プロジェクト6月4日(木)総索引についてのAB班合同会議。16人。7月2日(木)総索引についてのAB班合同会議。14人。

友の会創立15周年記念事業のご紹介

江戸東京博物館友の会会長　畠中　勇

15周年記念事業の内容が決まりましたのでお知らせします。「楽しく、ためになる」事業とするため、役員、各部会のみなさんで知恵を絞り、企画しました。多くの会員の皆様のご協力とご参加をお願いいたします。

◆常設展示図録の贈呈

3月にリニューアルオープンした江戸博の常設展示についての図録(タイトル未定)を全会員に配布いたします。現在、制作中で、来年3月中には皆様にお送りできる予定です。ご期待ください。

◆特別見学会

いつもの街歩きとは異なる、趣向を凝らした二つの見学会を行います。申し込みなどは、11ページの催事案内に掲載しています。

「浅草見番で味わう花街＆江戸情緒」
〔9月25日(金)開催〕

江戸を感じる街浅草の見番で芸者衆、幇間衆による踊りと芸を楽しむ催しを企画しました。浅草見番には芸者さんたちのお稽古やおさらい会などに利用されているお座敷があります。その和の空間を貸切り、幇間桜川米七さんの解説で、芸者衆の踊り、歌、三味線、幇間衆のお座敷芸を身近で楽しみます。鑑賞の合間には芸者さんと一緒の飲食も。お座敷遊びの雰囲気とともに、衣裳や装い、花街のしきたりなどに江戸の風情を感じることができるのではないかと思います。参加費は5,000円です。

「両国国技館と相撲博物館」
〔9月30日(水)開催〕

8月の友の会セミナーで講演をされた相撲博物館学芸員の中村史彦さんに、国技館内と相撲博物館の案内をしていただきます。国技館では土俵周りから力士仕度部屋、行司部屋など、普段一般人は立ち入りできないバックヤードの説明を聞きながら巡ります。1階の相撲博物館では部屋別総当たり制導入50年「昭和40年1月場所」の展示を中心に解説していただきます。多くの方が参加できるよう、午前と午後の2回行います。参加費は無料です。

◆特別セミナー

NHK大河ドラマの時代考証でもおなじみの小和田哲男先生による特別セミナー「真田の魅力－兄と弟の戦国時代」を来年2月28日(日)に行います。参加費は無料です。

◆感謝状・記念品贈呈

連続15年更新会員の方に謝意を表すため感謝状と記念品の贈呈を計画しています。詳細については検討中です。決まり次第、お送りする予定です。なお、次年度以降の連続15年更新の会員の方も同様となります。

◆町方書上翻刻刊行完結記念・セミナー＆パーティー

町方書上翻刻プロジェクトが読売新聞で紹介され大きな反響をいただきました。来年3月までに総索引を発行して完結します。これを記念して、友の会として記念セミナーと祝賀会を3月頃に開催します。詳細が決まり次第、『えど友』でご案内します。

◆『友の会15年のあゆみ』配布

10周年記念事業の一つとして『友の会10年のあゆみ』を発行しています。15周年においても『友の会15年のあゆみ』を作成し、来年の4月末に会員全員に配布します。

江戸

名所図会を歩く…㉑

[桜田から氷川明神社]

（麻布山善福寺本堂）

今回は江戸城の南側から麻布方面を歩きます。行程の途中は坂だらけで「町歩き」というより「坂歩き」の感があります。歩いたのは新緑のまぶしい5月中旬でしたが、早くも汗ばむような陽気でした。

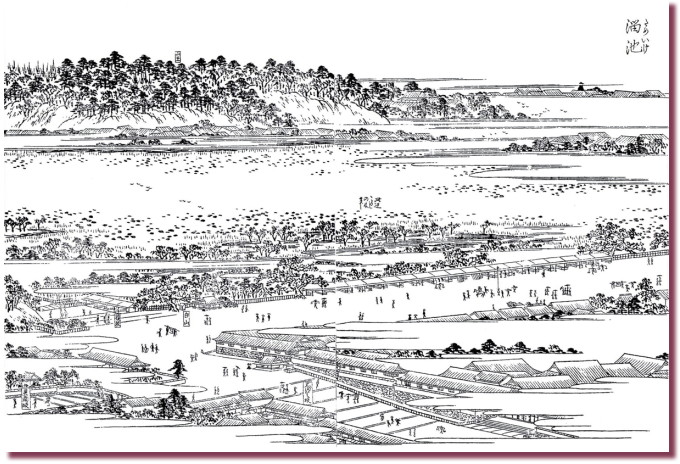
桜田から霊南坂

桜田は古い郷名で、おおよそ現在の日比谷・霞が関・虎ノ門一帯を指しています。今回の起点はこの名を冠した桜田御門(外桜田門)としました。東京メトロ桜田門駅を出るとすぐ目の前に門があり、ジョギングをしている人たちが次々とその下をくぐっていきます。門前から振り返ると桜田堀越しに国会議事堂が見えています。ここから彦根藩井伊家上屋敷のあった国会前庭は目と鼻の先で、桜田門外の変が江戸城の間近で起きたことが実感できました。屋敷の表門前にあった桜が井(桜の井)は洋式庭園のフェンス外にその姿をとどめています。もっとも、道路工事のため、元の位置から10mほど移動しているとのこと。六本木通りを挟んだ向かい側は官庁街で、国土交通省（広島藩浅野家上屋敷跡）と外務省（福岡藩黒田家上屋敷跡）の間を下る道が霞ヶ関坂です。図会には「霞関の旧蹟」としてここの勝景を詠んだ和歌が載せられています。

六本木通りを進んだ溜池交差点内には「溜池発祥の碑」が立てられています。かつてこの辺りから外堀通り沿いに赤坂御門の手前まで溜池が広がっていたとは、目の前の車の洪水からは想像もつきません。交差点を渡って次の信号を左に入ると榎坂となり、その先を右に上るのが霊南坂です。坂の由来はかつてこの地にあった高輪東禅寺の開山である霊南和尚によるもので、右側のアメリカ大使館の白壁と、左側のホテルオークラの蔦に覆われた緑壁が好対照をなしています。この坂下から左へ下るのが潮(汐)見坂、その先を右曲がりに上って霊南坂上に至るのが江戸見坂です。当時の見晴らしの良さが想像できますが、上り下りしても見えるのはビルばかりでした。

麻布山善福寺から氷川明神社

次の麻布山善福寺はかなり離れていますので、「江戸の坂巡り」を味わいながら歩くことにしました。霊南坂の先を直進すると、泉屋博古館分館の先の右手に御組坂があり、さらに進むと崖の手前で道は左へ曲がり、途中で右脇から崖下へ下る我然坊谷坂が分かれています。ここを下っていくと落合坂と交差する十字路があり、その先は階段のある三年坂の上りに続きます。坂上の道を左手の雁木坂を横目に歩いて行くと、外苑東通りに突き当たり、右方向に進んで麻布郵便局前の信号を渡ると狸穴坂の下りです。「まみ」とはタヌキ・ムササビ・アナグマの類いを指すので何の巣があったかは不明ですが、江戸の町中に野生動物が暮らしていたことがよくわかります。坂下の狸穴公園には稲荷神社があるので、まるで狸と狐の同居ですね。この先の交差点を渡ると左手には攘夷派の志士・清河八郎の暗殺された一の橋があり、向かい側は賑やかな麻布十番本通りです。通りにある老舗の一つ、豆源本店の角を左折してしばらく行くと、ようやく善福寺の看板が見えてきました。



▲長谷川雪旦　溜池

参道にある鹿島の清水(柳の井戸)からは今でも清水が湧き出しています。境内には親鸞聖人の伝説がある杖銀杏樹(逆さイチョウ)の大木が残っていて、国の天然記念物に指定されています。しかし寺の建物は戦災で焼失しており、勅使門(中門)・本堂・開山堂(蔵王権現堂)はすべて戦後に再建されたものです。ただし、本堂の建物は明和4年(1767)に建設された東本願寺八尾別院大信寺(大阪府八尾市)の本堂を移築したもので、江戸時代の浄土真宗本堂の様式を伝えています。また、安政6年(1859)には最初のアメリカ公使館が当寺に置かれており、公使ハリスの記念碑が逆さイチョウの横に立てられています。

元来た道を引き返し、童謡「赤い靴」のモデルとなった「きみちゃん」像のところを左折すると大黒坂の上りとなり、一本松坂・狸坂・暗闇坂と合流する長傳寺の前には挿絵に描かれている一本松があります。その由来は諸説ありますが、図会には「昔の松は枯れて、いま若木を植ゑ置けり」と書かれており、その後も植え継がれて現在のものは5代目です。

一本松坂を進んだ左手には氷川明神社(麻布氷川神社)があります。麻布の総鎮守で江戸氷川七社の一つです。こちらも戦災のため本堂は戦後の再建ですが、手水舎と神輿倉は戦前のものが残されています。狛犬が見当たらないので境内を探すと、片隅の地面にひっそりと2組が置かれていました。その姿はまるで昔話を語り合っているかのようでした。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

友の会15周年記念事業

特別見学会の概要は、９ページの「友の会創立15周年記念事業のご紹介」をご覧ください。

●特別見学会　「浅草見番で味わう花街&江戸情緒」

- 開催日時：９月25日(金)　14時～16時
- 申込締切：９月15日(火)　先着順受付
- 会場：浅草見番(浅草三業会館２階座敷、席は座布団席)
- 定員：80名　会員限定
- 参加費：5,000円(踊り鑑賞と昼食代)

＊参加費は前納(参加申込者に振り込み先と期限を通知します)

【企画担当責任者】小林弘明・川上由美子(事業部会)

●特別見学会　「両国国技館と相撲博物館」

- 開催日時：９月30日(水)　10時～15時の間
  午前の部　９時30分から受付、10時から見学開始
  午後の部　12時30分から受付、13時から見学開始
- 申込締切：９月17日(木)必着　午前か午後の希望明記
- 会場：両国国技館門内広場、国技館入口前にて受付
- 定員：200人(会員限定)　午前100人・午後100人先着順
- 参加費：無料

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

古文書講座

９月から第２期を開講

すでに申込は締切っておりますが、９月から下記日程で第２期を開講します。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：９／２(水)、10／７(水)、11／４(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：９／16(水)、10／21(水)、11／18(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：９／19(土)、10／17(土)、11／21(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

特別観覧会

●特別展　「浮世絵から写真へ　―視覚の文明開化―」

◆幕末から明治の浮世絵には新しく登場した写真への深い関心が読みとれます。かたや写真も浮世絵や絵画から様々な着想を得ている様子がうかがえます。今回の展示は二つの表現方法が互いに絡み合い多彩な表現を生み出しつつ近代化していく様子を明らかにするものとなっています。我妻学芸員の見どころ解説ともどもお楽しみ下さい。

- 開催日：10月16日(金)
  17時～17時30分：見どころ解説
  17時30分～19時：展示室自由観覧
- 申込締切：10月１日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／１階特別展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

友の会セミナー

第157回「江戸の下水道」

講師　栗田　彰さん(江戸下水研究家)

◆「江戸の町には下水道は無かった」と書かれている歴史書があります。ところが、江戸の町にもちゃんと下水道はありました。台所や井戸端の流し場から出た下水がどのようにして江戸の海まで流し出されていたのか。江戸の町の下水道がどのように作られていたのか。また、江戸の人々と下水道との関わりなどについて、『江戸名所図会』や江戸の町触れ、川柳などを参考にしながらお話することが出来れば良いなあと思っております。

◆講師略歴：くりた・あきら
昭和12年(1937)東京生まれ。日大法学部(夜間)卒。平成10年３月東京都下水道局を定年退職。現在、日本下水文化研究会評議員。著書：『江戸の下水道』『江戸の川あるき』『落語地誌』＝青蛙房・刊　『川柳江戸下水』『江戸下水の町触集』＝日本下水文化研究会・刊　ほか共著に『江戸と東京の下水道のはなし』『江戸の上水道と下水道』『荒川下流誌』など。

- 開催日時：10月25日(日)　14時～15時30分
- 申込締切：10月15日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

第158回「徳川将軍家姫君の婚礼」

講師　吉成　香澄さん
(豊島区教育委員会文化財保護専門員)

◆徳川将軍の姫君の婚礼というと、数多くのきらびやかな婚礼道具や、華やかな行列をイメージされるかと思います。その婚礼にいたるまでにはいくつもの段階があり、幕府・大名双方でさまざまな準備が行われました。このセミナーでは、将軍の姫の婚礼の様子をはじめとして、一般的な近世の武家の婚姻手続きについて、当時の文献や絵画などの資料をもとに紹介いたします。

◆講師略歴：よしなり・かすみ
学習院大学大学院史学専攻博士後期課程単位取得退学。日本近世史。徳川将軍姫君の婚姻や生活費、幕藩関係に

ついて研究している。主な論文は「将軍姫君の婚礼の変遷と文化期御守殿入用」(『学習院史学』47)、「将軍姫君の公儀付人・女中について」(『徳川林政史研究所研究紀要』44)。

- 開催日時：11月14日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：11月５日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

見学会

広重『名所江戸百景』周辺探訪 －その13(神田川下流(外濠)周辺) －

◆広重『名所江戸百景』は安政期の江戸の四季、風景、風俗などをこまやかに描いた作品です。この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪し、今の街の姿のなかに江戸時代の風景、背景を思い浮かべ、そこに吹く風や情景を少しでも感じていただこうとするものです。今回は、神田川沿いに、浅草橋から秋葉原～お茶の水～水道橋まで歩きます。江戸時代、日本橋馬喰町に初音の馬場があり、そこは徳川家康が関ヶ原の戦いに出発する前に、馬揃えをしたという、広重「馬喰町初音の馬場」絵や、神田明神の境内から元旦の早朝に若水汲みの神事を終えた神官・巫女らが、初日の出を見つめ、新しい年を迎える様子を描いた広重「神田明神曙之景」絵などを訪ねます。所要時間は約３時間、ＪＲ中央線「水道橋」駅で解散となります。

(今回、訪ねる広重の作品)「馬喰町初音の馬場」、「筋違内八ッ小路」、「昌平橋聖堂神田川」、「神田明神曙之景」、「水道橋駿河台」

- 開催日：11月８日(日)　受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時15分　最終受付：12時45分
- 集合場所：JR総武線「浅草橋」駅東口　改札出口
- 申込締切：10月29日(木)必着
- 定員：150名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆(事業部会)

催事のお申込方法

◆**普通はがき**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。

会員優待のお知らせ

会期残り僅かお見逃しなく！

●特別展
「徳川の城　～天守と御殿～」

会　期：８月４日(火)～９月27日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし９月14日、９月21日は開館)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●特別展　**「浮世絵から写真へ —視覚の文明開化—」**

会　期：10月10日(土)～12月６日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし10月12日、11月23日は開館、10月13日(火)11月24日(火)は休館)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

会期残り僅かお見逃しなく！

●くらべてみよう江戸時代

会　期：８月11日(火)～９月27日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし９月14日、９月21日は開館)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●市民からのおくりもの2015

会　期：10月20日(火)～12月６日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし11月23日は開館、11月24日(火)は休館)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**
＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第87号
平成27年９月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、光田憲雄、大橋弘依、(故・佐藤幸彦氏)
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910